

「図書館に通う」（宮田昇）では、図書館についてどのように言及されているか

文学部日本語日本文化学科 教授

佐藤 毅彦

1. はじめに

それ以前からもあったが、とくに、2000年前後から、図書館を貸本屋と対比させた、「図書館は（無料）貸本屋か」というフレーズが、日本の公共図書館について記述した文章の中で使われることがある。最近でも、たとえば、2013年に発表された、出版関係者の座談会で、「図書館も予算を確保するためには利用率を高めなければ」ならず「貸本屋化せざるを得ないところもある」との発言があった。1)その端緒のひとつは、林望が、月刊誌『文藝春秋』に発表した「図書館は無料貸本屋か」というタイトルの文章であるが、2)それに先立ち、当時の公共図書館の状況について、津野海太郎が日本図書館協会発行の『図書館雑誌』に、「市民図書館という理想のゆくえ」を発表し、図書館のあり方について一石を投じたことが、議論のきっかけとなった。3)こうした論議の一部は、一般のメディアにも取り上げられ、図書館や出版関係者以外の間でも広く知られることになった。4)

津野海太郎は、2013年2月現在、月刊誌『本の雑誌』に「百歳までの読書術」を連載中であるが、2012年12月号では、「退職年金老人、図書館に行く」というタイトルで、自らの最近の図書館利用体験にふれ「このところ日本でも昼まえに図書館に行くと、前期と後期の別なく男性高齢者のすがたがやけに目につく。私もふくめて、たぶん、その多くは定年退職者」で、「働きたくとも働けない中年以下の失業者諸氏も相当数、まじっているかもしれない」と述べている。5)この文章では、定年退職後の読書・本との関係や、職に就いていた時代との違い、などについてふれているが、高齢者となってからの図書館利用について記述している、という共通性のある事例として、「ここ二年間ほど、翻訳家の宮田昇氏のみすず書房のPR誌『みすず』で、『図書館に通う』という不定期連載（たいていは隔月）をつづけている」としている。6)その、宮田昇「図書館に通う」では、連載第3回で「後期高齢者になって、図書館を利用しはじめ」た、7)とあり、連載第7回では、「図書館には高齢化社会のニーズに応えている面がある。平日に図書館へ行くと、そこに見かけられるのは、本、雑誌や新聞を読んでいる老人たちである」と述べられている。8)

津野は、宮田昇について、「戦後日本における海外著作権エージェンシーの草分けともいえるべき人物で、そのまえは早川書房の編集者であった」と述べ、「生活実感的に言えば、まごうかたなき一人の退職年金老人である」と紹介している。9)

本稿では、編集者（出版社勤務）や海外著作権エージェンシー・翻訳者として長年にわたって活躍してきた宮田昇が、現代の公共図書館を利用する中で、図書館の状況について、『みすず』に連載された「図書館に通う」のなかで、どのように言及しているかについて、考察した。

※本稿の構成

(本号掲載)

1. はじめに
2. 宮田昇と「図書館に通う」の「図書館」
3. 「無料貸本屋」「公共貸本屋」について
4. 「予約」「リクエスト」と複本問題

(以下、次号：予定)

5. 図書館の資料選択について
6. 出版界と図書館
7. 図書館運営と図書館への提言
8. おわりに

2. 宮田昇と「図書館に通う」の「図書館」

宮田昇は、出版社に勤務し、海外著作権エージェンシーとして活躍するかたわら、翻訳著作権関連事情に関する著書を刊行し、自ら翻訳も手がけている。「内田庶」名義で、宮田昇が訳した『5人と一びき』は、かつて、NHKの少年向けドラマとして、放映されたことがある。1)

「図書館に通う」では、昭和10年代に、「小学校生の私」が「大橋図書館に初めて行った」際の印象や、2)国立国会図書館についても、ふれているが、「私の住む市の図書館」「私の街の図書館」という表現で、自らが現在、居住している市の図書館を、しばしば利用していることについての記述がみられる。3)

「図書館に通う」の連載第2回では、「首都圏とはいえ東京から電車で一時間もかかる」「私の市には、図書館は本館と分館で合わせて四館あるほか、各地区の市民センター、公民館に十一の市民図書室が置かれている」とあり、市内の図書館数や市民図書室の数から、これは「神奈川県藤沢市図書館」であると考えられる。4)

連載第5回で、宮田昇は、『夏草』という作品にふれているが、その著者「前田純敬は、私の市の住民であった」という。『夏草』は、「私の市にある図書館の一館」である、分館の「市民文庫」にあり、「『夏草』が蔵書されている図書館を訪ねた」が『市民文庫』の書棚には見つからず、「図書館員に調べてもらおうと、書庫に保存されている」という記述がある。5)この前田純敬の死亡を伝える新聞記事には、その時点での前田純敬の「自宅」が、藤沢市内にあることが記載されている。6)

宮田昇は、連載第2回では、「ネット予約や、近くの市民センターにある図書室や分館の開架式の書棚から、読み損ねたエンターテインメントの多くを気楽に読める便利さを享受している」「予約するとき、本の受け取り場所を指定する」が、「旧本館の分館か、近くの市民図書室のいずれか」である、としている。連載第14回では、「まずは公民館に併設されている市民図書室で、ついていちばん近い図書館で、書棚に並んでいるものから」借り

たこと。連載第 11 回では「市民図書室にあるのは、児童書や小説が主で、その蔵書数はスペースからいって図書館の補完的存在というより小さい。図書館通いの当初は、ずいぶん利用させてもらったが、読み進むにしたがい図書館の蔵書をリクエストせざるをえな」くなった、というように、市内の複数の図書館を使い分けていることも紹介している。

3、「無料貸本屋」「公共貸本屋」について

「1. はじめに」でふれたように、図書館を貸本屋に対比するような言説は、現在も存在するが、宮田昇は「図書館に通う」のなかで、何度かこの表現を使用している（なお、表記については、原文のままとした）。

連載第 1 回で、「この四、五年は、もっぱら東京の近郊都市で『無料公共貸本屋』として非難を浴びている公共図書館を利用する『隅の老人』になった」とし、自らの図書館利用について、「図書館の利用が、教養から始まって執筆の資料集めに変わり、さらに趣味としての読書にやっとたどりついた」と述べている。

連載第 2 回では、「読書を老後の趣味に、公共図書館を無料貸本屋として利用している私は」「ネット予約や、近くの市民センターにある図書室や分館の開架式の書棚から、読み損ねたエンターテインメントの多くを気楽に読める便利さを享受している」が、「現在の図書館を見ていくと、編集者として、著作権エージェント、時には著作権者として、出版にかかわってきたゆえに見えてくる問題」や「海外の図書館事情と比較しても多くの問題点がある」ことを指摘する。

同じ、連載第 2 回で「図書館の整備や蔵書の数が量的革命をおこしたことが、『図書館は無料の貸し本屋か』という複本論議に象徴される、著作権者側の批判を呼んだのであろう」「図書館の役割をきちんと議論して深めない限り、デジタル・ネット時代に、出版社は生き残ることは不可能であろう」と述べている。

連載第 3 回では、「多くの人に借り出されて読まれた本」の状態がわるいことをあげ、「背のゆがんだ古い本を提供することに、公共図書館は忸怩たる思いはないのだろうか」「それは複本問題に象徴される図書館への批判と関係があるのかも知れない」「『公共貸し本屋』という著者や出版社からのクレームがあって、なかなか本の入れ替えができないのか」「図書館への予算配分が限られ」「自治体の財政事情のため」「きれいな本に買いかえる余裕がないせいなのか」と述べている。

連載第 4 回では、昭和 24 年から昭和 31 年まで「零細な街の貸本屋を、数年間私が営んだ」経験をふまえて、漫画喫茶と貸与権の問題にふれ、図書館については、「公共貸本屋の一面をもたざるを得ない図書館が、貸与権の適用外になっているのは、改正時点に加えられた著作権法第三十八条 4 による。営利を目的とせず、貸与を受けるものから料金を取らない場合、貸与権は及ばないとされたからである」「このネット・デジタル時代、図書館も、資料の収集、保存の役割のほか、一般の教養、調査、レクリエーションなどに資する施設と定義されている以上、漫画喫茶よりもっと大きな変貌を刷るのではないだろうか。その

場合、図書館は営利を目的としないということで、たえず著作権法の制限のもとでいられるのかどうか、疑問である」と述べている。

連載第 11 回では、「私の仕事も次第に少なくなり、街の図書館、公共貸し本屋通いの時間が増えるにしたがって」「図書館で趣味として読んだのは、日本のエンターテインメント」であるとして「海外のエンターテインメントと較べて、遜色がないほど質的に高く、読み応えのあるものになっていることをはじめて知った」としている。

また、同じ連載第 11 回で「老いて図書館通いをして、公共貸し本屋を利用する人にもいろいろあるのに気が付いた」として、開架から抜き出す、リクエストする、など、また、リクエストも 図書館でする、インターネットを通じてする、などさまざまな利用のしかたあることを指摘し、「私の場合、予約待ちが多くあっても、分量のあるものは待つことにしている」と述べている。

連載第 12 回では「国会図書館や都や県の中央図書館で、資料を集めたり、調査をしたときと違い、街の図書館を公共無料貸本屋として利用するようになって、大いに享受できた反面、面食らうこともしばしばあった」と述べ、「出版社系週刊誌」のバックナンバーが貸出され、リクエストしたところ「四番めの予約待ち」だったことを紹介している。

同じ連載第 12 回では、「無料貸し本屋の影響を懸念する見方に反して、これを契機に、多くの文庫本、時には新刊を買いもした。興味を惹いた作家の著作を、間をおかず引き続き読む癖があり、図書館の予約待ちを待てないことがしばしばあるし、また、図書館に返却した後さらに読みたくなることもあるからだ」と述べている個所もある。

さらに連載第 12 回では、「図書館予算が削られていく状況を救うのは、公共貸本屋として非難をあびようと、著作者や出版社側からの抵抗があろうと、図書館利用者による貸出しが増えることである」「その市民の要求が自治体を動かし、図書館の充実が図られる。それは図書館の本来の役割からも、著作者、出版社に望まれることではないだろうか」としている。

連載第 13 回では、図書館の運営形態の変化にふれ、「地方自治体の財政窮迫が主たる原因とみて、間違いはない」「経費削減のターゲットは、公共貸し本屋といういわれのない批判を受けている図書館予算に集中しやすいはずだ」「図書館がほとんど囑託に支えられ、さらに経費削減を理由に民間へ委託したのであれば、専門能力を有する人たちが十分な処遇を受けられるはずはない。まして目的意識を持って働けるとは思えない」と述べている。

連載第 14 回では「日本の最近のエンターテインメントと出会い、初めて読んでその面白さを知ったのは」「図書館の開架でである」として、「初めて経験した公共無料貸本屋の開架の本は、背が崩れていて汚かった。それでも私は性癖から、面白かった作家のほかの作品を次々と渉猟し、市民図書室と図書館の双方に通った」と述べ、宮部みゆき 高村薫 桐野夏生、などの名前をあげ、「それを契機にして、図書館利用に飽き足らず、これらの作家の文庫本を買うようになった」とする。

連載第 15 回では「私は公共無料貸本屋といわれている図書館で、多くの推理小説を含む

エンターテインメントを読」み、「それで知った著者の本を買い求めた」「わが街の図書館は、老後の楽しみにとって欠くことのできない存在になっている」と述べている。

同じ連載第 15 回、連載の末尾では「公共無料貸本屋の誹りに負けることなく、利用者を増やし、多様な読書を可能にする努力が、いま図書館に求められていると思う」と述べている。

とくに、「無料」＝「タダで」という点については、連載第 9 回で「老後の趣味として図書館に通いはじめて、その蔵書があまりにも汚いのには唖然と」し、「借り手のモラルの低下以上に、汚れた本を棚において恥じない公共図書館と行政に、『タダで読ましてやる』という読者蔑視を感じた」「複本を非難する著作者側にも、図書館利用者を『タダで読んでいる』と見る同じ目線がある」と述べ、タダでなかなか読めない実態の例として、「昨年十二月に申し込んだノンフィクション」について、何冊か複本があるが、「まだ順位五十一番目の待機待ち」であることを紹介している。また、連載第 12 回では「いま必要なのは、『タダで』貸してやる運営から、購入図書などの情報開示による市民参加型に舵を切ることだと思う」との指摘もなされている。

「図書館に通う」のなかで、「無料貸本屋」「公共貸本屋」「公共無料貸本屋」ということばは、宮田昇が現在の自らの利用状況について、おもに「趣味としての読書」のために図書館を使っていることを説明しているケースと、出版関連業界から現在の図書館状況に対してなされる批判的な言説の例を紹介しているケース、に使用されている。宮田昇は、長年にわたって、出版社に勤務し、出版・翻訳の実務に関わってきたキャリアを有しているが、「図書館に通う」では、そうした業界からの図書館に対する批判的な見方に、必ずしも同調しているわけではない。

「1. はじめに」でとりあげた、津野海太郎は、「退職年金老人、図書館に行く」の末尾で、古本（旧刊書）について「必要な情報が OPAC で簡単に入手できるようになった」「今の図書館はむかしの図書館ではない。無料貸本屋などとバカにしてもらっては困る」と述べているが、1)宮田昇も「図書館に通う」のなかで、さまざま資料を、図書館を通して入手している例を紹介しており、「無料貸本屋」ということばで、公共図書館の現状を否定的にとらえているわけではない。ただ、たとえば、連載第 13 回では、「図書館が、資料収集、図書の貸し出しだけに終わらず」「地域の著作物の情報拠点となることが、いま求められているのではないだろうか」とするなど、資料提供にとどまらず、新たなサービスの方向性について、図書館に対する要望や提言を述べている部分が、「図書館に通う」には含まれている。

4. 「予約」「リクエスト」と複本問題

図書館関連業界で使用される「予約」「リクエスト」という用語に関しては、「もともと貸出中の資料への予約はリザーブ、未所蔵の資料への予約で購入にまわされるものはリクエストといていたが、最近では予約制度をリクエスト制度と呼ぶこともある。このため、

リクエストという言葉が2通りの意味でつかわれている」との指摘がある。1)宮田昇の「図書館に通う」でも、「予約」と「リクエスト」は、厳密に使い分けられているというわけではない。

その日に、その図書館で（その場で）入手できない資料について、後日の提供を依頼する制度の実態や利用状況について、「図書館に通う」で扱われているのは、刊行年の古いものや、その図書館の資料費予算・保存スペースなど、資料収集面での制約から、蔵書として所蔵していない資料を、同じ市内の他の図書館や県立図書館、国立国会図書館などから取寄せを依頼するケース 2)と、おおむね新しく刊行された資料で、利用希望者が多く、他の利用者によって借り出されているので、返却待ちとなるケース、がある。

前者の例で、「図書館に通う」のなかで、実際に、その場で入手できなかったものを、図書館を通して、宮田昇が借りていることが、明らかな資料としては、

連載第2回 荒正人『第二の青春』…（藤沢）市図書館のサイトで検索→『負け犬』との合本が富山房からでており予約可能→すぐ予約→市民図書室で借りる 3)

連載第3回 藤沢周平『藤沢周平未刊行初期短篇』…自ら「買い求めて一読」した→再読せず「友人に贈って」しまう→「急にまた読んでみたくなり」「図書館にリクエスト」→「図書館から借りた」 4)

連載第5回 前田純敬『夏草』…リクエストする→（藤沢）市図書館分館の「市民文庫」に所蔵→分館を訪ねる→「市民文庫」の書棚にはない→書庫に保存されていた 5)

連載第6回 服部達『われらにとって美は存在するか』…国立国会図書館に所蔵→（藤沢）市図書館のサイトを検索→「勝又浩編集で解説、年譜をつけられて復刻され」た講談社文芸文庫版を（藤沢）市図書館が所蔵→借りる 6)

連載第12回 江崎誠致『裏通りの紳士』…（藤沢）市図書館では所蔵せず→リクエストする→「相互貸借している県立中央図書館から、数日遅れで借りることができた」 7)

などが紹介されている。また、この後にふれる、日本のエンターテインメントで人気作家の新作にあたるもの、以外で、入手まで時間がかかっている例として次のケースがある。

連載第12回で、「ある会合で、出版社系週刊誌のインタビュー記事が話題となり」「その時点でもう市販されていなかった」ので、二週間ほどたって図書館を利用したとき「その週刊誌をリクエスト」して、すぐ読めるかとおもったが、「四番目の予約待ち」だった。「週刊誌の場合、開架にあるはずはないとしても、蔵書されていると思い込んでいた。まさか古い号が館内で読まれるのではなく、貸しだされ、しかも順番待ちなど、私の想像外であった」と、この件を意外なものと感じたことが示されている。

連載第13回では、ジャレド・ダイヤモンド『銃、病原菌、鉄 上・下』について、（藤沢）市図書館を検索すると、「二〇〇〇年十月に出て」おり、「リクエストをすると、上巻が三人、下巻が二人の返却待ち」だった。「出版されてから十一年余」「この著書はロングセラーを続けているだけでなく、発行時にベストセラーになり、話題を呼んだにちがいない」と感じて、「リクエストして、手にすることができるまで、ほぼ二ヵ月と二十日を要し

た」と述べている。「私が図書館にリクエストするころ『銃・病原菌・鉄』は文庫本が出ており、返却後に、関連文献が付された文庫本を入手（購入）している。

一方、おもに日本のエンターテインメントで、人気作家の新作や受賞作品など、利用が集中する資料に、図書館が複本を用意している例として、「図書館に通う」のなかで、ふれられているのは次のケースである。

連載第 11 回では、『蝸ノ記』で、第 146 回（2011 年度下期）直木賞を受賞した、葉室麟の著作について、「図書館の予約状況を見ると、案の定、二点を除いてすべて貸出中であり、自らは、文庫本が出ている 4 冊については購入し、受賞作の『蝸ノ記』についても「図書館から借り出すのをあきらめ」単行本を「買って読んだ」としている。9)（藤沢市）図書館における葉室麟の著作の所蔵状況については、図書館全体で、初期の作品は 2、3 冊、最近でも各図書館 1 冊、11 の市民図書室ではあわせて 2、3 冊であり、先の受賞作『蝸ノ記』でも複本が 2 冊ある図書館は 2 館。（連載第 11 回の執筆時点で）『蝸ノ記』は、予約待ち 136 人、予約待ちにあてられる図書館の蔵書は 6 冊で、平均すれば 1 冊あたり 22.6 人であると紹介され、10) 実際には購入した『蝸ノ記』について「私が予約順に待っていたら」「読むことができるのは、ほぼ一年後ではないだろうか」と述べている。

同じ連載第 11 回では、昨年 9 月に、「図書館のインターネットを通じてリクエストした」例として、東野圭吾『マスカレード・ホテル』、池井戸潤『下町ロケット』をあげている。そのとき、前者は、64 番目の待ちで、複本数は 9 冊、後者は、113 番目の待ち、複本数は 11 冊で、前者は、2、3 か月後、後者は 3、4 か月後に借りられるだろうと予測したが、（連載第 11 回の執筆時点で）予約待ち人数は、『マスカレード・ホテル』が 317 人、『下町ロケット』が 301 人、になっていることを伝えている。11)

連載第 14 回では、前年 9 月に予約してから、11 か月かかったので、半ばあきらめていた、東野圭吾『マスカレード・ホテル』を図書館から 8 月 3 日に借りて読んだことが紹介されている。奥付では 2012 年 9 月 5 日にでた本を、9 月 15 日にリクエストしているが、「最新刊のものをリクエストしたはじめてのケースであり、同時に池井戸潤『下町ロケット』もリクエストして、「借りられるのにどのくらい時日がかかるのかという好奇心があった」と述べている。

連載第 15 回では、池井戸潤『下町ロケット』を『マスカレード・ホテル』より「ひと月半ほど遅れて」借りたことが紹介され、（連載第 15 回の執筆時点で）4 つの図書館で、複本総計は『マスカレード・ホテル』が 12 冊、『下町ロケット』が 10 冊であり、「一年前後の待ちが必要である」状況になっている。「リクエストして一年前後待たされてみて、それら新刊をそうまでして読む必要があったかという疑問がわいた。図書館や図書室の開架にはまだまだ読書を誘う本が、十分、並んでいる」と述べている。

「図書館は（無料）貸本屋か」ということばが使われる際に、批判の対象となることのひとつは、利用希望者の多い本について、待ち期間を短縮するため、図書館が同じ本を複数購入しているという「複本」問題である。

連載第 11 回では、こうした状況について、「借りられるころには、興味を失っていることも多い」とし、「活字離れどころか、本を読みたいという欲求をもつ人が多くいる」「非難されている図書館の複本が、利用者の需要を充たしているわけでないことは、一利用者である私が体験していることである。複本の増加は、人口数に見合う図書館の質の充実の結果だとみたほうがよいと思う。図書館の利便性が、多くの人を読書にむかわせたのではないだろうか」「もっとも、予約数の多さに一部は、私のように本を買う例もあるだろうが、ほとんどはあまりにも長い待ち時間に読書意欲をそがれてしまっているのではないか」「図書館は十分、読書の普及、著作のパブリシティの点で出版社、著作者の利益にかなっていると思う。出版社も著作者も、図書館を敵視するのではなく、予算が減らされる一方の図書館に与して、その充実をはかるべきではないかと思う」と述べている。

連載第 14 回では「出版界、著作権者と図書館との関係は」「相乗効果が必ずしもあるわけではないが、切っても切り離せない、相身互いのところがあると思う」「少なくとも図書館は、敵視して制限を課す相手ではない」「過大な複本は問題だが、多数の市民が図書館を利用することは、とかく財政が窮迫している地方自治体の目が行く、図書館予算の削減の阻止に結びつく」とする。

複本に関して、別の角度から「図書館に通う」で取り上げているのは、図書館資料の劣化への対応、という点である。

連載第 3 回で「話題になって多くのひとに借り出されて読まれた本」について、汚れ、しみ、頁の折れ、破れ、書き込み、などにより、状態が悪いことを指摘し、「資料として借りた本には、この市の図書館のものにも汚損はないから、これらはエンターテインメント書に共通とみてよい」としている。複本問題に関連して、著者や出版社からのクレームにより、本の入れ替えができないのではないかと述べ、予算配分が減らされ、買いかえる余裕がないのかと推測している。「後期高齢者になって、図書館を利用しはじめ、『汚い本』を手にするたびに、図書館の役割とはなにか、それを考えざるを得なくなったのはそのためである」と述べている。

連載第 9 回で、アメリカでは、「幼児に親が本を読んでやる習慣があり」「一週間分くらいの本を図書館から借り出す。図書館は」「七回か八回貸し出すと、本が傷むので、新しい本に買い換える」ことを紹介し、「傷んだ本の買い替えは、児童書にとどまるものではないと思う。図書館が利用者のニーズに応える本を整え、読みやすく提供するというのは、図書館の存在価値を高めるものである」と紹介している。同じ連載第 9 回で、図書館で借りる本の傷みがひどいことから、自らは「文庫が出ている著者のものは、それを買うようになった」ことにふれ、「汚れた複本を、利用者が少なくなっても、図書館はなかなか廃棄しないから、見せかけの蔵書総数は増え、行政はそれをもってよしとしている実情がある」として、日本の文庫は、ペーパーバックのようにすぐ出版されないし値も高いことを指摘し、「複本論議はそれを抜きに語れないと思う。電子出版の時代、それを含めて流通システムや著作権まで俎上に上げて論議してほしいというのが、図書館利用者である私の希望で

ある」と述べている。

また、「予約」「リクエスト」の件数が多い「ベスト・オーダー」と、図書館での貸出回数や、書店で購入される点数が多い「ベスト・リーダー」との関係についても「図書館に通う」のなかで、扱われている。

連載第2回では、(藤沢)市の図書館の「ベスト・リーダー」「ベスト・オーダー」の数字を示し「これらの数字からすぐに答えを出すのではなく、それをどのように読み解くのが問われているのではないだろうか」と述べている。¹²⁾

連載第3回では、自らが、児童向け資料の翻訳にかかわった経験から、図書館での貸出が、著作権関係者に利益をもたらさない構造を疑問視している。「親たちがもっぱら買い与える児童書の場合、図書館でいくら読まれようと『ベスト・オーダー』は、かならずしも『ベスト・リーダー』にはならず、著作者はその恩恵を受けられない。それをどう埋めるか、デジタル・ネットの時代には、それがより問われると思う」と述べている。

連載第5回では、「日本においても、図書館のパソコンで『ベスト・リーダー』を検索してみると、列記されている十三点の作品のうち十二点が二人の作家のもので占められている」「寡占そのものになにか大きな問題がある気がしてならない」としている。

「図書館に通う」では、『蝸ノ記』『マスカレード・ホテル』『下町ロケット』のような、予約が集中する資料について、申し込みをしてから、実際に借りられるまでにどのくらいかかるか、(藤沢)市図書館の例をあげ、借りられるころには興味をなくしてしまうこともあることを実体験に基づいて紹介している。宮田昇は、自身では、文庫本を買うケースや、まれには『蝸ノ記』のように単行本を購入するケースもある、としており、多すぎる複本は問題だが、図書館については、出版界が「敵視して制限を課す相手ではない」と述べている。また、物理的にいたんだ状態となった資料を、新たなものと入れ替えることや、図書館と著作権関係者の利益との関係についても、検討していくべき、としている。

<以下、次号：予定>

注

1. はじめに

1) 植田康夫(『読書人』取締役編集参与)、清田義昭(『出版ニュース』社代表)、松田哲夫(編集者)「座談会 ベストセラーと出版界の危機的現実」(特集：出版界の徹底研究)『創』vol.43、no.2、2013.2、pp.28-40、では、「松田 出版界には、『図書館とブックオフに読者を持っていかれた』と言う人もいます」(p.30)、「清田 さつき、図書館が本を売れなくしているという見方が紹介されましたが、一方で読者の裾野を広げているという見方もあります。図書館というのはある種の市場なんですね。その市場の予算が落ちているという実態があつて、これも深刻です。図書館の予算増大化が必要です。松田 図書館も予算を確保するためには利用率を高めなければならない。だから貸本屋化せざるを得ないところもあるんですよ」(p.33)というやりとりがある。

2)林望「図書館は無料貸本屋か ベストセラーの『ただ読み機関』では本末転倒だ」『文藝春秋』vol.78、no.12、2000.12、pp.294-302

3)津野海太郎「市民図書館という理想のゆくえ」『図書館雑誌』vol.92、no.5、1998.5、pp.336-338

津野は、出版社に勤務し、編集者として活躍する一方で、出版関係についての多数の著書を刊行している。その後、和光大学教授・図書館長をつとめ、退職している。

下記の和光大学 HP では、最終講義の様子をつたえ、「2000年10月に」「着任」「2004年から6年まで図書館長」をつとめたことなどが紹介されている。

(http://www.wako.ac.jp/sougou/oldblog/campuslife/2009/02/post_128.php)

4)代表的なものを以下に示す。

「人気の新刊大量入荷 図書館の姿勢に賛否 『失楽園』や『五体不満足』1館で20冊ゆらぐ『良書を幅広く』『朝日新聞』1999.5.27、p.19

NHK 総合テレビ「ベストセラーをめぐる攻防 作家 vs 図書館」『クローズアップ現代』2002.11.7 放映

なお、このテーマについては、多数の論考が発表されたが、以下でもふれている。

佐藤毅彦「現代日本の文芸関係者のもつ図書館館の一断面 雑誌『図書館の学校』巻頭エッセイの分析 図書館はどうみられてきたか・5」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』vol.40、2004.3、pp.93-109

佐藤毅彦「現代日本の文芸関係者のもつ図書館館の一断面・続 雑誌『図書館の学校』巻頭エッセイの分析Ⅱ 図書館はどうみられてきたか・6」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』vol.41、2005.3、pp.31-51

5)津野海太郎「退職年金老人、図書館に行く 百歳までの読書術」『本の雑誌』2012.12 (通巻354号)、pp.70-73

なお、津野は、この文章の中で、「最後の砦が図書館なのだ」「民主主義国の公立図書館（個々の図書館ではなくその国の公立図書館ネットワークの全体）には、いったん受け入れた本はなんであろうと、だれにも利用可能なしかたで半永久的に保存し続けなければならない法的義務が課せられている」（p.73）と述べている部分がある。これは、何を根拠としてこのような表現をとっているかは記されていないが、日本の「図書館法」にはこのような表現に該当する条項は存在していないと思われる。

6)津野は、先の文章で「私よりも年長のインテリは、本は身銭をはたいて買うものと考え、図書館や利用者をバカにしていた」「宮田さんもつい最近まで図書館を積極的に利用しようとしなかったらしい」（p.73）と述べている。

宮田昇は、「図書館に通う」連載第2回で、一九七〇年ごろ、ピューリツァーについて調べたとき、アメリカの図書館のはたしている役割に驚いたが、「本は買って読むもの、借りる場合でも図書館で読むという偏見をもっていた」と述べている。

宮田昇「図書館に通う2 『広辞苑』と『第二の青春』『みすず』no.582、2010.5、p.38

- 7)宮田昇「図書館に通う 3 『未刊行初期短篇』の公表」『みすず』no.584、2010.7、p.56
8)宮田昇「図書館に通う 7 『彼もまた神の愛でし子か』」『みすず』no.593、2011.5、pp.48-49
9)みすず書房ホームページの「著訳者一覧」では、「宮田昇」について、次のように、記述されている。

1928年東京に生まれる。早川書房編集部、チャールズ・E・タトル商会著作権部を経て、1967年、日本ユニ・エージェンシー創設、元代表取締役。1991年、日本ユニ著作権センター創設、元代表理事。

(<http://www.mszy.co.jp/book/author/15052.html>)

「図書館に通う」は、2011年3月～2012年12月まで、月刊誌『みすず』に、ほぼ隔月で、15回にわたって掲載された

- 宮田昇「図書館に通う 1 出版社がこしらえた図書館」『みすず』no.580、2010.3、pp.24-29
宮田昇「図書館に通う 2 『広辞苑』と『第二の青春』」『みすず』no.582、2010.5、pp.34-39
宮田昇「図書館に通う 3 『未刊行初期短篇』の公表」『みすず』no.584、2010.7、pp.54-59
宮田昇「図書館に通う 4 貸本屋と漫画喫茶」『みすず』no.586、2010.9、pp.50-55
宮田昇「図書館に通う 5 キングと『夏草』」『みすず』no.588、2010.11、pp.54-59
宮田昇「図書館に通う 6 『われらにとって美は存在するか』」『みすず』no.591、2011.3、pp.54-59
宮田昇「図書館に通う 7 『彼もまた神の愛でし子か』」『みすず』no.593、2011.5、pp.48-53
宮田昇「図書館に通う 8 『ドクトル・ジバゴ』とアメリカ文化センター」『みすず』no.597、2011.9、pp.46-51
宮田昇「図書館に通う 9 『アメリカの出版界』と図書館」『みすず』no.599、2011.11、pp.34-39
宮田昇「図書館に通う 10 『リリアン』と『オリンピア・プレス物語』」『みすず』2012.3、no.602、pp.42-47
宮田昇「図書館に通う 11 『蝸ノ記』とペーパーバック」『みすず』2012.5、no.604、pp.28-33
宮田昇「図書館に通う 12 『裏通りの紳士』と開架」『みすず』2012.7、no.606、pp.30-35
宮田昇「図書館に通う 13 ジャレド・ダイヤモンドと運営委託」『みすず』2012.9、no.608、pp.40-45
宮田昇「図書館に通う 14 『暁の死線』と地域の図書館」『みすず』2012.11、no.610、pp.54-59
宮田昇「図書館に通う 15 『点と線』と書評」『みすず』2012.12、no.611、pp.58-63

2. 宮田昇と「図書館に通う」の「図書館」

1)この件については、以下でふれた。

佐藤毅彦「2011年、東日本大震災の年に、図書館はどのように言及されたか 映像メデ

ィアとコミック・文芸作品に登場した図書館・図書館員に関する事例研究』『甲南国文』vol.59、2012.3、pp.1-21

エニード・ブライトン著、内田庶訳『五人と一ぴきたんてい団』実業之日本社

同一内容のシリーズで、刊行年は、1964~1965、1969~1970、2002~2003、の3種類があり、書名の表記が異なっている（詳細は、上記、論考の注を参照）。

NHK 総合テレビ『五人と一ぴき』は、1969.4~1971.9、に放映された

宮田昇は、連載第3回で、この翻訳書と思われる出版物について、三十歳代のとき、「ペンネームで書いた児童物」があり、「その児童物というのは、海外のミステリーを子ども向きにリライトした、もともとは中学生向け学習月刊誌の付録として小冊子にまとめられたもの」であった。読者に好評で、他社から単行本として出版され、「図書館や学校図書館が買い入れてくれるおかげか、部数はきわめて少なかったが毎年、増刷されもしていた」が、「いまでもよく読まれているというのは、私にも予想外のことであった」と述べている。

宮田昇「図書館に通う3 『未刊行初期短篇』の公表」『みすず』no.584、2010.7、pp.58-59

2)宮田昇「図書館に通う1 出版社がこしらえた図書館」『みすず』no.580、2010.3、pp.25-26

3)津野海太郎「退職年金老人、図書館に行く 百歳までの読書術」『本の雑誌』2012.12（通巻354号）、では、「図書館に通う」で取りあげられる図書館について「千葉県？ それとも神奈川県かな。とにかく東京から一時間ほどのところにあるらしき海辺の街が、宮田さんのいう「私の住む市」である」（p.71）と紹介している。

4)宮田昇「図書館に通う2 『広辞苑』と『第二の青春』」『みすず』no.582、2010.5、p.35

藤沢市には、総合市民図書館、南市民図書館、辻堂市民図書館、湘南大庭市民図書館、の四館と、長後、明治、辻堂、御所見、片瀬、遠藤、六合、善行、藤沢、鶴沼、村岡、各市民図書室が存在する。なお、総合市民図書館内には、藤沢市点字図書館、がある。

また、JR東海道線の普通列車での東京―藤沢間の所要時間は、50分程度である。

5)宮田昇「図書館に通う5 キングと『夏草』」『みすず』no.588、2010.11、p.58

前田純敬『夏草』高城書房（鹿児島）、2004.4、の所蔵状況について、藤沢市図書館のホームページで、「蔵書検索」を実施すると「湘南大庭市民図書館」の所蔵となっている。なお、藤沢市図書館のホームページの「湘南大庭図書館」の部分には、「市民文庫」について、「藤沢にゆかりのある人の著作を集めたコレクションです」と記述されている。

6)「前田純敬氏死去 作家」

(<http://www.47news.jp/CN/200402/CN2004021201003182.html>)

3、「無料貸本屋」「公共貸本屋」について

1)津野海太郎「退職年金老人、図書館に行く 百歳までの読書術」『本の雑誌』2012.12（通巻354号）、pp.70-73

4.「予約」「リクエスト」と複本問題

- 1) 「予約制度」：図書館用語辞典編集委員会編『最新図書館用語大辞典』柏書房、2004、pp.555-556
- 2)連載第5回では「国会図書館に行かなくても、地元の図書館からリクエストすると、その自治体の指定図書館に届き、持ちかえりはできないが、そこでなら読めるシステムがある」ことを紹介している。

宮田昇「図書館に通う5 キングと『夏草』『みすず』no.588、2010.11、p.58
- 3)荒正人『第二の青春 負け犬』富山房、1978
- 4)藤沢周平『藤沢周平未刊行初期短篇』文藝春秋、2006
- 5)前田純敬『夏草』高城書房（鹿児島）、2004
- 6)服部達著・勝又浩編『われらにとって美は存在するか』講談社文芸文庫、2010
- 7)江崎誠致『裏通りの紳士』筑摩書房、1958
- 8)ジャレド・ダイヤモンド『銃、病原菌、鉄 上』草思社、2000
ジャレド・ダイヤモンド『銃、病原菌、鉄 下』草思社、2000
文庫化されたものは、以下の通り。
ジャレド・ダイヤモンド『銃、病原菌、鉄 上』草思社文庫、2012
ジャレド・ダイヤモンド『銃、病原菌、鉄 下』草思社文庫、2012
- 9)葉室麟『蝸ノ記』祥伝社、2011
- 10)「(藤沢)市の図書館蔵書数合計は、十七冊」「図書館は本館含めて四館」「地区の十一の市民センターに市民図書室があり、それらに一冊ずつおかれているから、予約待ちにあてられる図書館の蔵書は六冊」である、とされており、図書館本館・分館の所蔵資料6冊をもって、(藤沢市)図書館全体の予約待ちに対する貸出にあて、市民センター図書室の蔵書はその施設の利用者に提供する、というシステムをとっているものと思われる。

宮田昇「図書館に通う11 『蝸ノ記』とペーパーバック」『みすず』2012.5、no.604、pp.31-32

ちなみに、藤沢市図書館の検索結果には、検索した資料の各図書館での所蔵状況が表示され、市民図書室所蔵分については、「資料の状態」の欄に「図書室の資料です。予約は図書館にお問い合わせください」と表示される。
- 11)東野圭吾『マスカレード・ホテル』集英社、2011
池井戸潤『下町ロケット』小学館、2010
- 12) (連載第2回の時点で)「ベスト・リーダー」を検索すると、13点の作品のうち、「八点が東野圭吾の新刊」「四点が宮部みゆきのもの」であり、「ベスト・オーダー」を検索すると、「村上春樹『IQ84』上巻は四九〇人、下巻は四二一人、港かなえ『告白』は三五九人、東野圭吾『新参者』は三一三人の待ちであった」ことが、紹介されている。

宮田昇「図書館に通う2 『広辞苑』と『第二の青春』」『みすず』no.582、2010.5、p.39

(文中で参照したwebページは、2013年2月の時点で公開されていたものです)